

どんべえ物語

畑正憲作品集

14

畑正憲作品集 14

どんべえ物語・

—ヒグマと二人のイノシシー

1978年11月25日第1刷

著 者／畑 正憲

装幀者／矢吹申彦

発行者／阿部亥太郎

発行所／株式会社 文藝春秋

〒102 東京都千代田区紀尾井町3

電話（代表）03-265・1211

印 刷／凸版印刷株式会社

製 本／加藤製本株式会社

定価 880 円

© Masanori Hata 1978

Printed in Japan

万一落丁乱丁の場合はおとりかえ致します

どんべえ物語

誕生

北海道への旅立ち

美わしき霧多布へ

二人のイノシシと隊長たち

ヒグマを求めて北海道へ

子グマを求めて大雪山へ

ハナコとタロー

ついにどんべえを

さあ面会！　どんべえクン

5

7

8

11

15

18

22

26

30

34

ヒグマの母と子

ハナコとどんべえ

準備はいよいよ最終段階へ

どんべえをわが手に

おまえの名はどんべえ

飼育の第一歩

親馬鹿のはじまり

山からのヒグマ

霧の中のコッコ

指しゃぶりの秘密

38

41

45

49

52

56

60

64

67

73

島へ

子グマの外科手術	78
ミルクと怪鳥音	82
音と匂いと味と	85
尻と鼻と胸と	89
ケネボク島の新しい家	92
ムチと素手と	96
よだれと白旗	100
傷だらけの栄光	104
チーズとキャラメル	107
子グマのおモラシ	111

乳離れ

やってきた離乳期	116
夢の超特急	119
いよいよトウメイ高速へ	123
子グマは外べんけい	127
オンコの特訓	131
クマ、木に登る	134
雨と霧の隅で	138
鎖とゲンコツと	142
人とクマ、そして力の論理	145
子グマへの一撃	149
一人のイノシシに	153

暗く明るい夜	157		
夏の盛りに	163		
わが子、どんべえ	164		
高度恐怖症	167		
ナガラ族の遊び	171		
穴と匂いの周辺	175		
袋の安全性	179		
ヒゲとムツゴロウ	183		
ぬか蚊、泥の特訓など	187		
防蚊防寒コート	191		
愛の献血運動	195		
ボルガの舟引歌	198		
10万バリキ水冷式エンジン	202		
小さな家出	203		
家出人 やーい	210		
そこには細い道が	214		
食事をめぐって	218		
動物園ゴッコ	222		
アフラコとどんべえ	226		
天才現わるナノダ	229		
耳と友情	234		
好物づくし	237		
海へのいざない	241		
ついに泳いだ	245		
日記より その一	249		

日記より	その二
秋の日課	
夜のどんべえ	
冬への準備	
祖父母来訪	
王国への旅	
冬から春へ	
原野の星屑	
添い寝の記	
閉じこめる日に	
リンゴの差入れ	
冬がやってきた	

291	287	283	279	276	275	270	266	263	259	256	252
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

しみじみと	どんべえを
雪の下のどんべえ	
冬ごもりではないぞ	
お尻の毛玉	
再び長い眠りに	
再び冬眠室に	
そこまで春が	
さあ	これから
ムツゴロウの放浪記 (14)	

327	322	318	314	310	307	303	299	295
-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----	-----

どんべえ物語

ヒグマと二人のイノシシ

誕生

北海道への旅立ち

下北半島のつけ根にある三沢市の上空で右へ折れた飛行機は、ちりめん皺しわを寄せてにぶく光る津軽海峡を越え、日高山脈の真上をごくゆっくりと北上していた。

海面で騒ぐ白波や吹流される雪の具合から判断するとかなり風は強いように見受けられたが、気流は安定しているらしく、機は小ゆるぎもせず飛んでいる。眼下にはただ雪。前の日、丸一日欠航を余儀なくさせた吹雪で運ばれた雪が、比類のない新鮮さで大地を埋め尽していた。

雪どころか、霧や霞かすみすらなかった。黒い木が点々と顔を出す広漠たる大地の上には、はね返されてとまどっている日の光だけがあふれていた。

すごい晴天である。大雪の山々はもちろんのこと、右

手に雌阿寒岳めあかたけ、雄阿寒岳おあかたけの姿がくっきり認められた。その上天気と広さのせいだろうか、実際は時速数百キロで飛行しているはずの飛行機が、大空の一点で静止しているように思えた。

一九七〇年、十二月の末日。機内には、新しい年を迎える慌あわただしさと一種の明るさが持ちこまれていた。しめ飾りやデパートの派手な包紙が通路にはみ出し、会話も格別に甲高いかたが。その中で僕は、息をつめて下界に見入っていた。

北海道でヒグマを飼ってみよう。それも、狭いオリの中に閉じこめるのではなく、住居をすなわちオリにして、僕自身が中にクマと一緒に入って。

そう思い始めてからというものの、計画を立てては崩し、崩しては立ててきた。

その夢にまで見た計画を実現する第一歩、気もそぞろな旅立ちである。だが、北海道へ近づくにつれ、うわついてばかりもいられないぞ、と僕は自分をいましめ始めてもいた。

これはかなり危険な作業である。何といってもヒグマは陸上最大の肉食獣であり、力の強さは群を抜いている。

一瞬の油断と飼育のミスが死につながることを僕は知っていた。それだけに、やっと計画に着手できたというよろこびと共に、たとえようもない不安を覚えていないと言えは嘘になる。僕は生涯にそう何度もは味わえないだろう厳粛な気分になりながら、雪の日高山脈を見下ろしていたのだった。

「どんべえ……」

僕は小声で呟いていた。

「どんべえよ。おまえは今、どこにいるのか」

雪はあくまでも白く、全てのものを包んでしんと静かである。どんなに眼をこらしたって、どこにいるのかわかるわけがない。ヒグマはとくに穴の中に入って、悠々と眠りについているのだ。

……それに、まだ生まれてもないだろう。夏に交尾をしてみごもり、初春に出産することが確かめられているのだから、まだ母親のお腹の中にいて、ときどき手足を突っ張って暴れ、母親をびっくりさせているのではあるまいか。

オスとメス、どちらが先に入らるだろうか。たとえメスが先であっても、どんべえと名づけよう。どんべえ

とは、僕が動物に贈るとして置きの名前だ。

動物の飼育や観察に関して、僕はこれまで現地主義というか、その動物が定着している所へ出掛けることを信条としてきた。最も生き生きとした状態で眺めたいからである。だからここ当分僕を占領する今回のヒグマにしても、北海道を除いては考えてみたこともなかった。ヒグマは北海道で飼わねばならぬ。

が、具体的に土地探しを始めてみると、いくつかの小さな反対に出会わねばならなかった。十分に安全措置を講ずると言っても、

「グマツ子連れてくるんじゃないあ」

と、尻ごみされることがままあったのである。人々が抱くヒグマのイメージは、東京と北海道では格段に違っていた。

さまざまな調査の後、僕は北海道での一年目を無人島で暮らそうと決めていた。友人や知人に北海道のまわりに点在する島を調べて貰い、厚岸湾の東にある嶮暮帰島を第一候補地として選び出してもいた。

一部の新聞に誤報されてしまったが、無人島を選んだのは、ヒグマを飼う際の安全性を考えたからではない。

無人島は昔からひとコマ漫画の題材であるし、何といつてもロマンチックではないか。選んだのは、ただそれだけの理由である。

ヒグマが泳がないのなら、無人島ほど理想的な飼育環境はないだろう。第一、オリを作る必要がないので、経済的にもたすかるし、動物のより自由な振舞いが観察できる。

しかし、実際にはヒグマは水を怖れないし、かなり長い距離泳ぐのである。元上野動物園長の林寿郎氏の本には、津軽海峡を泳ぎ渡った例があげられている。そのスキミナは驚異的である。

なかでも、僕の心に焼きついて離れないのは、島捜しを手伝っていただいた道庁林務部の俵浩三氏の話である。

「ある秋のことです」

と、北海道の自然について何冊もすぐれた本を出版している俵氏は眼を細めて、

「稚内^{ちうち}の近くの山地からでしょうか、一頭^{ひと}のヒグマが海を泳いでいたのです。これは礼文島^{れぶんとう}の近くで発見され、驚いた漁師たちが総出で船を寄せ、カイでめった打ちにして沈めたそうです」

僕はこの話を聞いた時、危うく叫び声を上げるところだった。北国にふさわしいとはいえ、あまりにも暗い絵ではないか。

北の海は決して青くはない。その日、海はどんよりと垂れこめた空を映して、ただ銀色にうねっていたに違いない。そこを泳ぐヒグマも漁師も船も、ひたすら黒いシルエット。誰一人声を出すものはいず、銀の飛沫^{びまつ}を上げてカイだけがうち下ろされる。

ヒグマは必死で手近の船に泳ぎ寄ろうとするが、冷たい水の中に浸り過ぎていて思うにまかせない。そして、ついに笛の音のような鳴声を残して、ぶくぶくと沈んでいく。

「やった！」

漁師たちは初めてそう叫び、そそくさと帰り仕度をする。と、しばらくして、ヒグマが沈んだ辺りに赤い小さな点が現われ、やがてはつきり鮮血だとわかるほど広がっていく。

見たわけではないが、僕の脳裏にはそういう暗い絵がくっきりと浮かんで、すでに消すことができなくなっていた。ことの善悪は問いようもないが、ヒグマと北海道

に住む人とのつながりを暗示しているようでもあった。

このようにヒグマが泳ぐ動物である以上、僕はヒグマ飼育に関しての道の条例に従わねばならない。それはいいおし紹介することになろうが、人命がかかっているものだけに、すぐきびしいものだった。

とつおいつ幻を追いながら下界を眺めているうちに、四角い人家の数が増えてきた。牧場らしき建物、防風林、煙を吐く工場。大雪山の南の入口、帯広空港へと着陸の態勢に入っているのである。

「よし、当たって砕けろだ」

僕は座席の前のカメラバッグを引寄せ、いつもの自分を取戻していた。

もう、ためらいは無用である。強引に相手の懐にとびこまねば、何事もうまくいかないものだ。

こうして僕が一九七〇年の暮れに帯広にたどりついた時には、準備はほとんどゼロの状態だった。

美わしき霧多布へ

帯広から釧路へ。

釧路では朝日新聞の通信局を訪れ、局長の吉川さんにお目にかかった。僕がこれから本拠地にしようとしている霧多布は浜中町に属し、釧路地方管内の東のはずれに属しているので、原稿その他で以後いろいろとご面倒をお掛けするに違いない。

吉川さんは小柄で痩せてはいるが、雪の吹きだまりを軽やかにとび越えたりして、釧路港が一望に収められる丘の上の小さな喫茶店に案内してくださった。

丘の上にはライラックの林。今でこそ葉が落ち尽して、黒く細い枝がほんのり青い北国の空に貼りついて網目模様を作っているが、初夏には花をつけ、その強いかおりがむせんばかりにあふれることだろう。

「いい所ですね」

僕がそう賞めると、吉川さんはとめどもなく北海道の素晴らしさを語った。

そして、最後に一言。

「あなた、成長し切ったヒグマを見たことがありますか」
「ええ」

もちろん僕はうなずいて次の言葉を持ったが、質問はそれだけだった。吉川さんは眼を転じて、静かに港を見下ろしている。

あのでっかいおやじを見たことがあるか。

計画の細部を問題にせず、たったそれだけを訊いたのは、いかにも北海道をよく知っているベテラン記者らしかった。

成長したヒグマの姿形は、見ると聞くとでは大違いである。観光客の眼をひくために土産物屋の前につながれているのはほんの子供でしかなく、五年、十年とたった成獣は側に寄ると小山のような感じがする。その四肢は僕らの胴ほどもあり、肩や腰には筋肉が盛上がつて力感にあふれ、人間のひ弱さをつくづく思い知らされる。

六年ほど前のことだ。僕の属していたグループが北海

道の記録映画を作った時、

「ヒグマならまかしとき」

と胸を叩いた威勢のいいカメラマンがいた。彼は柔道、空手、合気道など武芸百般に通じた偉丈夫だったが、阿寒で本物を見た途端に顔色を変え、列の後尾を歩くようになった。武芸はあくまで人間用に考案されたもので、ヒグマには通用しないことを悟ったのである。

キザな言い草だが、ヒグマと共同生活をするために必要なのは力ではなく、やさしい粘り強い愛であろう。害を与えない仲間として人を認識させねばならぬ。

それは可能だろうか。

野生動物はその種類によって、家族化する際の難易度が大きく違っている。一般的に言えば、群れを作る動物は比較的慣らし易く、単独生活を好むものは成長するに従って野性をむき出しにするようだ。

だから、たとえ図体は大きくともゾウなどは家族化が易しく、トラやヤマネコは困難である。群れを作るということは、身近に仲間がいることを要求し、ボスの存在を認めることでもある。

コンラート・ローレンツがアヒルで典型的に示した

「すりこみ」を利用するのも一つの方法だろう。彼はアヒルの雛ひなを使って、子供の脳に親がすりこまれることを明確に示してもいる。

動物の脳には、奇妙に不可逆的などころがある。いったん憶えてしまったものには固執するし、そのために身を亡ぼすことだってある。

わかり易い例はイヌである。ちゃんとしたイヌは、乳離れした直後から世話をしてくれた主人を絶対に忘れない。まるで昔の武士のように、二君には相まみえないのである。僕が知っているセバードは、四歳の秋、主人が死んで他所へ貰われ、その息子を手ひどく咬んで薬殺されてしまった。

離乳期の子を手に入れば、ヒグマといえども友だちにはなれるだろう。しかし厄介なのは、ヒグマには独立する日があることだ。親に保護されて育った子供は、必ずいつか独立する。その際両者の間に、葛藤かつどうが渦巻くことは十分に予想出来る。それをどう切抜けるかが僕の課題でもある。

もう一つ肝に銘じておかねばならないのは、動物の子供が遊び好きな点である。彼らは、半ば本気でたわむれ

るが、壊れ易い人間である僕としては、相当の覚悟をしていなければ、けがをして泣く羽目にもなるだろう。

そんなことを考えながら、僕は港の見える喫茶店を後にしたのだった。

釧路から浜中町までは約七〇キロ。自動車で一時間の旅である。車は根室本線にそって静かな雪道を走った。

地図によると、根釧原野は横に広くのび、根室半島のつけ根にまで達している。その端を走っている道は完全に舗装されているが、向こうからくる車はごく僅か、東京では考えられない空きようである。

右側にはしばしば荒涼とした湿地が現われ、左にはサルオガセがまといつた樹林が続いている。一歩中に入ると、穢けがされぬ自然が続いているのだ。僕は車の窓にかけりついて、一時間ほどたっぷり楽しんだ。

浜中町という町名は、オタノシケというアイヌがつけた地名に由来しているそうだが、それは浜の中央という意味であり、長い砂地の海岸の中央に霧多布の町があり、その中央にかなり立派な浜中町役場の新庁舎があった。

来意は吉川さんから伝えていただったので、話とはほとんど拍子に運んだが、嶮暮帰島に住みたいと言っ

と、鳥居町長、平野主事の二人とも眼を丸くして、

「あそこに住むのですか。夏ならともかく、冬を越した人はいませんよ」

と、一瞬呆れ返り、それから疑惑のマナザシで僕を見つめた。

「駄目でしょうか」

「駄目じゃないでしょうが、妙なことを思いついたものですな」

「売っていただけると一番いいのですが、それが無理なら、端っこを貸していただくだけで結構です。どうでしょうか」

「それは」

と二人は顔を見合わせ、しばらくして、

「貸すだけならお貸ししましょう。コンブ漁の番屋がありますので、こちらで交渉しておいてあげますよ」

それみたことか。何事も当たって砕けろである。懸念していた島の件は、こうしてたちまち解決してしまった。

以後、これから続々とこの物語に登場する町の方々に目にかかった。どなたも快く相談に乗ってくださり、島の件を確約してくれた。それで僕は、島のどの部分を

借りるかは、この人々にお任せしてしまった。

霧多布の長い海岸線はなだらかに湾曲し、琵琶瀬という浜で最も島に近くなる。僕はそこから初めて島を間近に見て、胸をつかれる思いがして立ちすくんだ。

そこには、頭に描いていたロマンチックな雰囲気はひとかけらもなかった。ただ、薄ねずみ色の海の彼方に、うっすらと雪をかぶった黒い岩のかたまりがあるだけだった。家族を引連れて住むには、あまりにも寒々としているではないか。

島へは小舟で約二十分。

役場の人に案内していただいて島へ上陸してみると、不思議にも、うら寂しい感じは消しとんでしまった。それだけが身上である、どこだって住めば都だという気概を取戻したのである。

島の頂上からは、天然記念物に指定されている原生花園が見え、春の美しさを予想させるに十分だった。左手には、先住民の古墳がある丘。

無人島の上は広い台地。道内でも屈指の野生スズランの名所だという。僕はその花畑のただ中でヒグマとたわむれる自分を早くも想像していた。